

佐藤春夫の台湾体験と「女誠扇綺譚」

— チャイニーズネスの境界と国家・女性 —

Satô Haruo's "*Jokaisen-kitan*" and His Experiences in Colonial Taiwan :
The Boundary of Chineseness, Nation and Women

磯 村 美保子

Mihoko ISOMURA

目次

序章 この論文の目的と要旨

第一章 佐藤春夫の台湾旅行

1-1 佐藤春夫の台湾旅行

1-2 1920年、日本支配下の台湾と前・台湾

1-2-1 前・台湾

1-2-2 植民地時代前期—専制支配の確立 (1895~1919)

1-2-3 矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』から

1-2-4 二つのナショナリズムの萌芽

1-2-5 台湾における文学運動

1-3 「植民地の旅」— 台湾知識人との出会い

1-4 「霧社」— 台湾原住民との出会い

1-5 植民者であることの不安

第二章 「女誠扇綺譚」をめぐって

2-1 作品とその評価をめぐって 先行研究から

2-2 「女誠扇綺譚」のテキストの異同について — 佐藤春夫の書き換え

2-2-1 三種類のテキストの存在とテキストの異同について

2-2-2 書き換えの意味

2-3 「女誠扇綺譚」における感覚表象とことば

2-3-1 感覚表象に関する考察

2-3-2 「女誠扇綺譚」における感覚表象と表現の特徴

2-3-3 かれらの話した言葉—プリミティブな女のことば

2-3-4 台湾の華人たち—沈家の末裔

2-4 世外民と私

終章 チャイニーズネスの境界と国家・女性 — 「女誠扇綺譚」の深層

資料 佐藤春夫台湾・南方関連作品年譜

参考文献一覧

序章 この論文の目的と要旨

16世紀以降本格的に展開した東南アジアの華僑社会と制度としての国民国家との矛盾は、各地で様々な形で現れた。広範な海洋貿易を展開していた台湾周辺の華僑にとっても帝国としての国民国家日本との出会いは、予期せぬものであったに違いない。国家＝ネーションという華僑にとって考えも及ばぬイデオロギーが、「チャイニーズネス」と異質なアイデンティティを彼らにもたらすこととなったのである。

この「異質なアイデンティティ」とは何か。華僑は中国からみれば一時的に私的に海外で活動しているもの、帰国予定者である。しかし、19世紀以降のヨーロッパ・日本によるアジア一帯の覇権争いによって彼らの私的な活動は、ネーション・ビルディングという新たな地域の段階に関与せざるを得なくなる。すなわち、主権・人民・領土をはっきりと明示した国際公法が西洋によってスタンダードとして強要されたのである。彼の地にあった華僑たちは、この国家という制度の中に閉じ込められた。彼らはすでに帰国予定者ではない。

台湾という中国大陸の対岸、沖縄の南に位置する島の歴史は、この華僑と中国、そして帝国としての日本、さらに華僑と原住民が関わる、まさにチャイニーズネス（中国性）の境界の歴史である。

この植民地下の台湾をめぐるのは多くの文学作品が残されている。日本人作家が書いたもの、台湾人作家が書いたもの、日本語作品、中国語作品などさまざまである。佐藤春夫も訪台（1920）をきっかけに植民地台湾をめぐる作品を書いた。その多くは小説集『霧社』に収められ、代表作が「女誠扇綺譚」である。

「女誠扇綺譚」（1925）には、台湾南部の街、安平をモデルとした禿頭港を舞台に、様々な人物が登場する。「日本人と台湾人」とい

う言葉だけでは表現しきれない多様性が、言語や感覚表象を通じて描かれる。この作品は日本の台湾支配から30年あまりの月日を経て発表された。そこにはいくつかの二重性が隠されている。主人公である「私」と「世外民」、
「漢文と日本語」「泉州語と台湾語」「沈家の娘と下婢」などである。現在と過去の時間が交錯し、内地人と本島人が出会う地点に「私」がいる。植民者と被植民者、有産か無産か、男性と女性、エスニシティなどが物語の中で複雑に交差しているのである。

「女誠扇綺譚」に関して、藤井省三は「台湾ナショナリズムへの友愛の眼差し」が感じられると評価している¹⁾。そこには死とナショナリズムの物語が結びつく構図が期せずして現れる。台湾ナショナリズムの生成は、対中国と対日本の意識が複雑に交差するところで行われたものである。

植民者であることを自ら当然視する姿勢は佐藤にはなかった。彼は、「霧社」や「南方旅行」というルポルタージュ作品において、日本人であることへの不安と恐怖を描く。そこには、帝国としての日本国家と融合しない自意識が描き出されているといえよう。しかし「植民地の旅」で記述されているように、林献堂を前に佐藤が問いた「友愛」は植民地支配の矛盾を解決するものではない。植民地主義を前に、知識人の脆弱なヒューマンイズムは、彼自身をも恥じ入らせたのである。以下、この「女誠扇綺譚」の重層的読みの試みを通じ、台湾が体现するチャイニーズネスの境界、そこに生きる女性の問題について考察していく。

第一章では佐藤の台湾行の時代的背景と個人的体験を考察する。1920年の夏、3ヶ月ほどの台湾滞在の間に佐藤はさまざまな台湾知識人や「蕃人」、日本人と出会う。その出会

1) 藤井省三『台湾文学この百年』「大正文学と植民地台湾 佐藤春夫「女誠扇綺譚」」

いがのちの台湾をめぐる一連の作品群となって現れることとなる。これらの作品の中には、彼が台湾という植民地＝境界にあって、日本人であることの不安を抱いていたことが表わされている。

第二章では、テキストの異同と作中の感覚表現、言語、登場人物の造形などの分析から、「女誠扇綺譚」を読み解く。この作品で伝統を担わされ、死んでいく下婢が象徴するものについて考察したい。

最後に、これらの考察を通じて明らかになった、台湾人のチャイニーズネスの境界と、そこに生きる女性と伝統の問題について考察する。佐藤が「女誠扇綺譚」で表わしたものは、国民国家日本の植民地主義がもたらした台湾島の更なる重層性であったと考える。

さて、稿を進める前提として考えておかなければならないことがある。台湾というかつての日本の植民地の問題を、文学作品を通して考察するという行為には、どのような意味があるのだろうか。作家と作品、そして現実の間の距離について、レイ・チョウはアルチュセル、マシュレの理論に基づいて「芸術は歴史からその材料をとっているという単純な理由でイデオロギー的である」と述べ、以下のように指摘している。

（マシュレは、批評の機能は読むという行為のうち設定されている距離を介して文学作品を「生産する」ものである、としている。）イデオロギーと同じように文学作品は完全であると同時に不完全でもある。つまり、文学作品はすでにできあがっている歴史の産物であり、その限られた中で、批評の介入によらなければ「完全」にはなりえないのだ²⁾。

一個のイデオロギーである文学作品の読みという行為には受容という側面があり、それ

はあらたな生産行為である。日本統治下であった1920年代の台湾を舞台に書かれた「女誠扇綺譚」にどのように批評的に介入すべきなのであろうか。以下、考察を進めていきたい。

第一章 佐藤春夫の台湾旅行

1-1 佐藤春夫の台湾旅行

佐藤春夫（1892～1964）は、1920年に台湾を旅行した。台湾で歯科を開業しようとする和歌山の旧友東熙市の誘い、谷崎夫人との恋愛問題の鬱屈をきっかけにしたという。6月末から10月のはじめにかけての4ヶ月あまりの旅行であった。当時、新進の作家として注目されていた佐藤は各地で歓迎された。小説集『霧社』（1937）に収められた「かの一夏の記」によれば、基隆港に到着後、台北に向かい台湾博物館勤務の森丙牛³⁾に会い、旅行に関して相談している。その後すぐに東の居のある高雄に行く。この地を基点に台南以南を巡り、対岸の廈門・漳州まで足をのびした。旅程に関しては森の「みるべきところをつくしてやろう」という親切な教えに従い、通常の旅行者が不便のあまり省いてしまうような鹿港付近もルートに入れている。

打狗（高雄）にいるうち安平を見て感興を得たのが女誠扇綺譚である。（中略）……女誠扇綺譚の建物や安平の風景は実景のつもりである。

「かの一夏の記」より

佐藤は、高雄滞在を終え、嘉義、日月潭、

3) 佐藤春夫「詩文半世紀」（『作家の自伝12』）には森について以下のように述べている。

「（森は）日清戦争と同時にこの島に渡り、蛮人の研究を志し、言葉に京なまりがあり、片足は不自由らしく、は行していたが、見かけによらない豪傑で、身に寸鉄も帯びないで、蛮山を横行して、蛮人からは日本の酋長であろうと噂されている人であった。その身は閑職にあったが、総督府内の古顔でもあったしから、上司にはわたくしのために便宜をはかってくれるように頼んでくれるし、自分では島内の見るべき場所とその道順とをスケジュールに作ってくれた」森は1926年に投身自殺している。

2) 『中国と女性のモダニティ』p109～110

霧社、鹿港、台中などを半月あまりで回り、台北に森を訪れ、もてなしを受けている。高雄から台北に向かう途中、霧社付近のサラマオ社の原住民の蜂起が起こり、それを目撃することとなった。『霧社』に収められている作品の舞台については以下の通りである⁴⁾。

「日章旗の下に」	恒春
「女誠扇綺譚」	安平
「旅びと」	日月潭
「霧社」	埔里社、霧社、能高山
「殖民地の旅」	台中、鹿港、胡盧屯、 阿单霧

佐藤の台湾上陸は7月5日、離台は10月15日とされている⁵⁾。

1-2 1920年代、日本支配下の台湾と前・台湾

佐藤が旅行した当時の台湾はどのような状況だったのだろうか。1895年から1920年前後までの台湾領有以後の日本の植民地統治の経過、さらに漢人大量移住前の台湾を見ておきたい。

1-2-1 前・台湾

16世紀半ば、ポルトガル人に「発見」される前、すでに台湾にはマレー・ポリネシアン系の原住民が全島にわたって住んでいた。彼らはそれぞれ部族に分かれて生活し、独自の言語と習慣を持って生活していた。当時、漢族系の人口はごくわずかであり、明王朝も台湾を化外の地とし、その支配は及んではいなかった。しかし、東アジア海域の貿易が盛んになるにしたがって、台湾地域は、海賊や密輸の中継基地として注目されるようになる。それに伴って次第に対岸からの漢族系移住者

が増加し、平埔族と呼ばれる原住民との混住がすすんだが、平埔族以外の原住民は次第に山間部に追いやられるようになる。

一方、ポルトガルやスペインのアジア進出に遅れをとったオランダは、1603年台湾海峡の澎湖諸島に上陸、明の軍勢に追い払われながらも、1622年には占領に成功した。澎湖島には元の時代、巡検使が置かれていたが明王朝はこれを放棄していた。しかし、オランダの占領を知った明は反撃を開始し、攻防の末、澎湖島からの撤退と引き換えにオランダの台湾占領を認めることとなった。明がこれほど簡単にオランダの台湾支配を認めたのはもともと彼の地を領土と看做していなかったからであるという指摘もある⁶⁾。

その後、オランダはただちに台湾南部の安平に上陸(1624)し、ゼーランド城を建設した。さらに翌年に赤崁^{シヤッカム}にプロビンシャ城を建設した。この安平が佐藤の「女誠扇綺譚」の舞台となる。そして泉州出身の鄭芝竜の息子鄭成功がオランダを駆逐するのが1661年である。「反清復明」を掲げたその鄭政権も1683年には清によって倒され、台湾は清による統治の時代を迎えるのである。この鄭氏政権下で最初の漢族大量移住が行なわれた。

清の台湾経営は消極的なものであった。台湾が再び「反清」の巢窟になることを防ぐための抑制政策をとったのである。しかし、212年の清の支配のもとでは、先住民や移住民による反乱が100件ほどおこったという。清国政府の消極的な台湾統治を積極的に転じさせたのは、皮肉なことに1871年の日本の台湾出兵であった。清が台湾の騷擾に手を焼いている隙に、隣国日本は帝国の道を歩み始めていたのだ。下関条約で台湾を日本に割譲したのは、それからわずか24年後のことであっ

4) 「佐藤春夫と台湾・福建の旅」『作家のアジア体験』p77

5) 藤井省三『台湾文学この百年』「大正文学と植民地台湾 佐藤春夫「女誠扇綺譚」」P79～

6) 伊藤潔『台湾』第二章、第三章に詳しい経緯が述べられている。

た。

1-2-2 植民地時代前期—専制支配の確立 (1895~1919)

台湾は日清戦争の終結時の下関条約によって割譲された。これに先立つ20年ほど前、宮古島の島民が航行中、台風に遭遇、南台湾の牡丹社に漂着したところをパイワン族に殺害された事件(1871)があった。それを口実に明治政府は台湾に出兵し(1874)、清朝に多額の賠償金と琉球の日本帰属を認めさせた。その際、台湾に関して軍事民生を通し綿密な調査を行ったという。台湾の植民地経営は無方針だったといわれるが、このように台湾への領土的野心は早くからあった。1890年には外務大臣命令で台湾実地調査も行われている。その指示は以下のような内容だったという。

若し他日温帯地方の人民該島に占拠又は移住するが如きことあらば、其生活の方法は如何、民心の向習は如何等の諸点までを深く考察の上、些細報これ有難く候⁷⁾

当初、台湾では軍事支配が先行し、財政的には赤字だったが、経済的な独立を達成したのは1905年、「領台」からわずか10年足らずだった。日本にとっては、国防の島であり、経済的価値を生む島であった。

台湾割譲が決定されてすぐに台湾民主国の成立が宣言された。しかし、清の支援もえられず孤立、日本軍の軍事侵攻の前にあえなく消滅した。領台初期には現地人の武力蜂起が絶えず、台湾総督府はその鎮圧に手を焼くことになる。

台湾での政治的支配体制は次の三つの制度によって確立された。第一に総督の命令がそのまま法律となる「六三法」(1896)という

律令制度、第二に全島に張りめぐらされた警察制度(1897)、第三に総督の専断にまかされる「台湾総督府特別会計」である。このいずれもが台湾総督の絶対的権力を保証するものであった。

初めに挙げた「六三法」は、日本帝国議会の立法権を台湾には与えないというもので、台湾が日本に含まれるのか否かの論争が起こった。この悪法は、1937年まで継続された。二番目の警察制度は総督府の警察局から始まり、州長警察部、郡市警察課、街庄警察分室、派出所、駐在所と各村落に限なく配置された。警察官は台湾民衆の生死までにぎる暴君となった。その補助手段として保甲制度(1898)があった。保甲制度は、中国が行っていた制度であるが、台湾人が自らを縛る相互監視の密告組織である。この保甲と警察官=「大人」は、民衆に直接関係し恐怖の対象となっていたため、後の小説家に題材として取り上げられることも多かった⁸⁾。このような民衆による相互監視制度は、歴史上いくつか例がみられるが、戦後は国民党政権に引き継がれていった。

第三の「特別会計法」は総督府の苛税と専売収入の増大を確立した。専売品目は十数種に上り、阿片も含まれ膨大な収入を生むこととなる。台湾財政は、当初日本政府から13年に渡り3,710万円の援助を受けることになっていたが、わずか8年(1905)で打ち切ったのである。

この時期には、6人の武官総督が統治したが、大きな影響を残したのは、児玉源太郎と後藤新平である。後藤新平は児玉の下、総務長官として辣腕をふるった(1898~1906)。縦貫鉄道、基隆・高雄の築港、総督府庁舎の建設の四大政策を行い、電気水道の整備を行っ

7) 戴國煇『台湾—人間・歴史・心性』p 59

8) 頼和「事を惹き起こして」(1932) など

た。後藤は「旧慣調査」を行ったことで有名だが、旧慣を温存しつつ、台湾人と日本人を分断、台湾人同士も警察組織を張り巡らせ分断し統治したのである。

1985年からの統治政策は、日本資本誘致のための基礎整備を統治の目的とした。台湾を文明化し同化するというのは、西洋の植民地支配との差異を示し、権威づけるための口実に過ぎなかった。しかし、この時期の後半には、1911年に辛亥革命、1919年には三・一独立運動が起こるなど、民族主義的運動が世界的に高まりを見せた。「領台」当時の人口300万人のうち、255万人が中国系の移民であった台湾にもその影響が広まりつつあったのである⁹⁾。そして明石総督(1918年6月～1919年9月)の頃には、同化主義が打ち出されるようになる。同化は差異を覆い隠す。台湾人が日本人と「平等」の立場を求めた先にあったのは、同化という名の新しい差別であった。

1-2-3 矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』から

「台湾領有」は、日本にとって初めての植民地経営であった。台湾は植民地であるのか、日本=非植民地なのか、という議論もあった。それは、植民地経営の方式として間接統治形式をとるか、直接統治形式をとるかの論争でもあった。この定まらない方針が台湾植民地経営の特色であったといえよう。

矢内原忠雄は、その著書『帝国主義下の台湾』(1929)のなかで台湾の植民地経営について以下のように述べている。

歴代台湾総督の施政方針として訓示せるところは大正7、8年の交をもって前期二期に分かつを得る。前期は兎玉後藤政治を基調とするものとして台湾社会の特殊認識に基き社会的には旧慣尊重、政治的に

は本島人に対する差別的警察専制政治、政治の内容は治安の設定島内産業の資本主義的發展、内地人の官僚及資本的勢力の確立、及び教育施設に対する冷淡に存した。後期は明石総督以後昨年(昭和3年)新任の川村総督に至る迄10年間に総督を替ふること六度の頻繁に上ったが、その一貫せる基調は田総督の訓示に求めうる。即ち台湾社会の特殊認識より転じて内地延長主義に移り、教育尊重、文治政治、民族的融和を説くと共に、経済的には島内産業の開発より進みて特に台湾と内地の連結及び南支南洋への發展を高調するに至った。前期を日本帝国主義下の台湾の警察政治的建設時代といはば、後期は文治的發展期に入れるものである。要するに帝国主義が島内にありては従前よりも少々柔軟なる衣装を著ると共に、島外に対する積極的な経済發展を高調すること、これ近年台湾統治政策の特徴である。

矢内原忠雄は、同化主義を強く批判したことで知られている。その思想は人種主義から免れえなかったものであるという批判もあるが¹⁰⁾、机上の論議になりがちであった当時の植民地研究の中で実際に足を運び、自ら得た情報を下に貴重な研究を残した。矢内原によると、台湾統治の初期の兎玉、後藤らは、植民の本業であるところの経済的利益の追求に専念するため、まず旧統治階級の親清勢力の鎮圧、ついで土匪の反抗を抑えることに忙しく、教育は二の次だったことがわかる。「一視同仁」は最初から植民の目的としてあったものではなく、後から付け加えられたものでしかなかった。

1-2-4 二つのナショナリズムの萌芽

《台湾議會設置請願運動》 《台湾文化協会》 《「祖国派」「待機派」「独立派」》

漢族住民による武装闘争は、1915年の西来

9) 伊藤潔『台湾 400年の歴史と展望』 p 74

10) 小熊英二『〈日本人〉の境界』 p 188～194

庵事件以後沈静化した。植民地統治に対する不満に端を発した闘争は、1000人に上る住民の大量虐殺と903名の処刑で幕を閉じた¹¹⁾。虐殺の地「タバニイ」は大虐殺の代名詞になり、住民には恐怖の記憶が植え付けられたという。苗栗事件（1913）とこの西来庵事件は、いずれも辛亥革命以後の民族意識の高まりの中で起こった。指導者には、それぞれの革命の理想があった。この点から前期に多発した偶発的な闘争とは区別されるべきである。

このような前中期の武装闘争中心の抗日闘争は、1914年11月の板垣退助の來台以降、質的な変化を遂げることになる。台湾人に日本人と同様の権利を与えるべきであるとする板垣の熱弁は「台湾同化会」（1914.12）を設立に導いた。「台湾同化会」は翌1915年1月に総督府によって解散を命じられたが、これを契機に新たな運動が展開されることとなる。

《台湾議会設置請願運動》

1921年、台湾議会設置請願運動が始まった。また、啓蒙団体である台湾文化協会も同年発足した。この同時期に始まった運動は、いずれも内地延長主義が推し進められた文民総督の時代に生成・発展・消滅していったのである。まず、台湾議会設置請願運動について概略を述べておきたい。

1915年以降の弾圧（台湾同化会、西来庵事件）を避け日本に留学していた知識層の政治的成熟とともに、圧制のシンボルともいえる「六三法」の撤廃を求める声が強まった。しかしながら専制打破の運動の方向がきまったのは、林呈祿¹²⁾の論文「六三問題の帰着点」（1920）において「六三法撤廃運動は台湾の特殊性を否認し内地延長主義を認めるもので

ある」とし、「台湾議会設置請願に運動の方向転換を図るべきである」と主張したことが契機となったという¹³⁾。東京の台湾人留学生などの集まり「新民会」では、完全自治か、議会設置か、の議論が交わされたが、指導者の林献堂の裁定により「議会設置運動」へと方向性が決まった。まず、議会設置を求め、その後完全自治を獲得するというのが、林献堂の考えだった¹⁴⁾。

この請願運動は、1921年から1934年まで15回¹⁵⁾に渡って続けられた。「台湾議会請願ノ出現セント同時ニ台湾人ノ人格ガ生マレタリ」と、請願者の一人蔣渭水は述べ¹⁶⁾、大きな期待をもって始められたが、15回とも審議未了か不採択で終わっている。この運動は、日本国内の大正デモクラシーの風潮にも後押しされ、植民地体制の受益者である土着郷紳層と近代的教養を身につけた、つまり日本語を流暢に話す新興知識層によって推進された。おりしも台湾総督の政策が「漸進的内地延長主義」に変更されつつあった時代であった。

この途方もない忍耐をもってすすめられた台湾議会設置運動の意義を若林正文は、第一に総督府統治の変更、台湾人の政治的自由と人権の状況を改善する可能性があること、第二に「台湾大の自治」を要求することによって、運動に民族的形式を得ることによって台湾人のナショナリズム形成の戦略となりえた

13) 河原功『台湾新文学運動の展開』p.139

14) 林のこの決定には、1907年の梁啓超との面談の際、梁の「祖国中国はしばらくは台湾をたすけることはできない。よって当面の間日本本国の良識の士と結んでその同情を得、総督府を牽制し圧制の緩和をはかるとよかろう」という助言が影響しているといわれる。

15) 署名はピーク時には（1927年）2000名を超えた。

16) 若林正文『台湾抗日運動史』p.67。台湾議会設置運動と大正デモクラシーの関係については『近代日本と植民地6』の若林論文にも詳しく考察されている。

17) 若林正文『台湾抗日運動史』第一編、第2章に詳しい。日本政府は「地方自治レベル」と「国政レベル」の間に台湾全体のレベルは設けようとしなかった。

11) 史明『台湾人400年史』p.381

12) 当時新民会幹事。日本留学後中国にも渡る。広い見識を持ち、台湾社会運動の指導者の一人。

点にあると指摘している¹⁷⁾。

《台湾文化協会》

台湾人の政治的権利を要求する運動としての台湾議会設置請願運動と「台湾文化の発達」を掲げる台湾文化協会は、同じ年の1921年に運動を開始した。推進メンバーは、台湾議会設置請願運動と同じく林獻堂、蔣渭水、蔡培火らである。蔣渭水は台湾文化協会の会報第一号で「台湾の臨床講義」として以下のように記している。

台湾は「原籍—中国福建省、現在—日本帝国台湾総督府」「病状—道德退廃、迷信、知識浅薄、卑屈、怠惰」「診断—世界文化の低脳兒、知識榮養の欠乏」「治療—知識榮養剤の補給」¹⁸⁾

台湾文化協会は、台湾の大衆に「知識榮養剤」を与える役割を果たした。その活動は、文化講演会、出版、演劇など多岐に渡った。その綱領は次の十項目である。

1. 農村ノ文化ヲ向上ス（後に大衆文化を促進実現す、に改められる）
2. 商工ノ知識ヲ増進ス
3. 自治精神ヲ涵養ス。
4. 青年ノ求学ヲ奨励ス
5. 女権思想運動ノ提唱
6. 婚姻制度ノ改良
7. 阿片吸引ノ禁止
8. 悪習、迷信ノ打破
9. 衛生思想ノ普及
10. 時間恪守ノ奨励¹⁹⁾

1923年から26年までの最盛期には、講演八百回、聴講者三十万人に達したという。しかし早くも1927年には、左右の対立が激化し分裂する。あらゆる階級のものが参加した文化協会の活動は、それゆえに分裂を余儀なくさ

れた²⁰⁾。この分裂には、五四運動を展開中の中国本土への台湾人留学生が増加し、中国志向が高まったことの影響も見逃すことはできない²¹⁾。台湾議会設置運動が始まったとき、蔣渭水は「台湾人ノ人格ガ生マレタリ」と述べた。台湾人としての民族運動であるこれらの運動の高まりとともに、「自己定義」と「先祖がえり」が進行したのである。台湾人作家呉濁流は以下のようにその心情を語る。

台湾人は…強烈な郷土意識をもっていると同時に、祖国愛もまた持っている。(中略)しかし台湾人の祖国愛は決して清朝を愛しているのではない。清朝は満州人の国であって、漢人の国ではない。日清戦争は満州人が日本と戦って負けたのであって、漢人が負けたのではない。(中略)清が滅びて民国が興ったので、台湾人は一層祖国を思慕するようになった²²⁾。

呉は「親に死に別れた孤兒」のように「ただ恋しい」、「この気持ちは異民族に支配された植民地の人民でなければ分からないだろう」と語っている。しかし、復帰しようとした祖国中国は、いまだ近代化をなしえず、軍閥割拠の状態に苦しんでいた。台湾抗日運動にみられる「待機」の姿勢は、「光復」を望みつつも、それが果たされない望みであるを知っていた人々の間に生まれたのである。

《「祖国派」「待機派」「独立派」²³⁾》

台湾の1920年代の社会運動は、前述の台湾議会設置請願運動、台湾文化協会、台湾民報（台湾民報については、本章第2節「出版」参照のこと）に代表される。この三つの運動の構成メンバーは、重なっており抗日という点で一致していた。これらの運動は、1920年

18) 伊藤潔『台湾』p 113, この文章が原因で発禁処分を受けた。

19) 下村作次郎他『よみがえる台湾文学』p 25~26

20) 分裂によって台湾民衆党（蔣渭水ら）成立、しかし左傾したため1930年台湾地方自治連盟（林獻堂、蔡培火）が結成された。

21) この文化協会分裂には「上海大学グループ」の影響があった。

22) 若林正文『台湾抗日運動史研究』p 233

23) この分類に関しては、若林正文『台湾抗日運動史研究』第2編に詳しい。

までの日本の抗日勢力に対する徹底した武力鎮圧を目の当たりにし、改良主義的になっていた。この時期の運動は、合法的に台湾人の権利を求めるものであり、その意義は台湾人意識の形成にあったといえるだろう。

台湾の社会運動は、辛亥革命後の中国からも影響を受けていた。前述のように中国への留学生の増加²⁴⁾がそれを促したのである。その中で「祖国派」と呼ばれるグループが生まれた。「祖国派」は、日本支配からの解放は、まず祖国中国の建設に加わり、祖国の力をもって為すのが早道と考えた。しかし、中華民国樹立直後から混乱を深める祖国に対する期待が薄れ、「待機派」が生まれた。つまり、当分の間は祖国に期待せず、台湾において日本の同化政策と戦い、民族的な活力を維持しようとするものである。1927年²⁵⁾には文化協会が左傾、分裂するが、この時期から1931年²⁶⁾にかけて国際共産主義運動の影響を受けた「台湾革命派」が登場する。「革命派」はコミンテルンの指導を受けた台湾共産党がその中核をになった。日本帝国主義の打倒、台湾共和国のためには日本の革命が必要であると、台湾共産党は日本共産党台湾支部となっていた。「待機派」以外は、いずれも中国か日本の変革を先んじて行うべきという方針であり、植民地では、革命運動すらも宗主国か旧宗主国に従属することを示している。

以上のような台湾抗日運動に見られる心性は、二つのナショナリズムの萌芽を示す。一つは中華ナショナリズムであり、もう一つが台湾ナショナリズムである。若林正丈はこの時期の台湾ナショナリズムについて日本人と

台湾人の境界は明確であったが、台湾人と中国人との境界が曖昧であったことを指摘し、中華ナショナリズムと台湾ナショナリズムの対立は厳密に言えば戦後のことであると述べている²⁷⁾。しかし、前述のように、中華的なものに投企する台湾知識人と、日本支配によって生まれた台湾人としてのアイデンティティは、この二つのナショナリズムによって、その記憶に常に呼び起こされるものなのである。台湾ナショナリズムを真に強固なものにしたのは、戦後の中国との対立、外省人支配であったが、その萌芽はこの時期にあった。

1-2-5 台湾における文学運動

日本による支配が始まって以降、1920年代、さまざまな社会運動が隆盛するに伴い、文学運動も起こった。台湾新文学運動である。この運動は文学運動というより社会運動として位置付けられる。1931年の社会運動への弾圧があつてからは、多くの活動家が文学運動に身を投じることになる。台湾の文学運動は、中国白話文運動、新旧文学論争、プロレタリア文学運動、郷土文学論争など、台湾、中国、日本を結び活発に展開された。以下に時代区分を示しておく。

第一期 1895～1921

漢詩文が日本と台湾の共通の文芸的基盤であった時代。

第二期前期 1922～1931

台湾新文学運動の台頭期。中国白話文が定着した時期。新旧文学論争、プロレタリア文学の勃興期でもあった。

第二期後期 1932～1937

台湾新文学運動の展開～衰退期。郷土文学論争があり、台

24) 1920年19人、23年273人、28年344人。『台湾新文学運動の展開』p123より

25) 1927年蒋介石のクーデター、南京政権樹立に伴い、労働運動学生運動に厳しい弾圧がくわえられ、台湾の抗日運動家らは深く失望した。

26) 1931年に台湾共産党は解体された。

27) 『台湾抗日運動史』p445～

湾話文に対する意識が高まった。

第三期

1937～1945

戦時下の台湾文学，中国文による創作禁止，新聞の漢文欄禁止など，中文作家は離脱し，日本語作家を多く輩出，文壇も日本人主導となる。

佐藤の訪台は1920年であった。当時は第一期の終盤であり，台湾に根ざした漢詩文の伝統が徐々に消えつつある時期であった。

1-3 「殖民地の旅」-台湾知識人との出会い

『霧社』に収められた「殖民地の旅」にはさまざまな台湾人との出会いが描かれている。「殖民地の旅」は，台湾から帰って12年が経過した1932年に『中央公論』に発表された。この出会いがのちに書かれた「女誠扇綺談」の人物造形に関係していることは内容から推察できる。

この「殖民地の旅」の中に描かれている台湾知識人には，土地の案内役の青年A²⁸⁾，そして鹿港の街の詩人とその息子，また林熊徴（民族運動家林獻堂をモデルとしている）などがいる。

まず，案内役の青年Aは，「この地方の中等程度の学校を二三年前に卒業してその後州庁の雇員に採用されたという，まだ二十歳を三つとは超えぬ青年」であったが，佐藤の案内役として，懸命な，配慮の行き届いた手配をしている。彼は議論好きな青年として描かれ，案内の途中で鹿港の出身であることがわかる。青年Aは，「詩的な市街としての鹿港を力説」し，「台湾民主国の建国運動の歴史

を僕に説いて止まなかった」。

僕はただ彼らが裏面に於てはこのように好んで口舌の雄でありながら，或はAの如き身は内地人にされる一小吏となって榮達を計り，或は一般に好んで内地人と交を締することを名誉としているかの如き風習があるのを見ると，彼らの態度を卑屈として同感することの出来ない節も少なくないのである。²⁹⁾

また，鹿港の街の本島随一の詩人は，佐藤の希望は叶わず会見は出来なかったが，「詩人は非常な変人で寧ろ頑迷と称すべき」で，当時においてもまだ辮髪と支那式の服を着，扇子を持った老人であった。詩人は日本人も支那人も嫌いだ，自分は清朝の遺臣であるといい，日本好きの息子と意見が全く合わない。佐藤は，彼の漢詩を読み「高踏的世外人」であると評している。この「世外人」ということばは後に考察する「女誠扇綺談」のもう一人の主人公の名前「世外民」と通じる。「世外人」である彼は，日本と台湾という二つの文化秩序の間で，どちらへの帰属も選ばない。しかし，それは，「選ばない世外人」であることができる一部の階級の特権であった。多くは，青年Aのように面従腹背の態度でこの時代を生き抜くしかなかった。佐藤の記述がそれを明らかにしている。

また，林獻堂との会見は，総督府の庇護の下に旅行していた佐藤とのものであっても警察官の監視の下で行なわれるという緊張したものであった。林は佐藤に旅の印象を尋ね，さまざまな居住民のいる台湾における問題はなにかと尋ねる。佐藤は「蕃情の不穩」を挙げたが，林の質問の主眼は内地人と本島人に関わる差別の問題であった。林は文明度の点で，蕃人は本島人にもはるかに劣り，その人

28) 河原功は「佐藤春夫「植民地の旅」の真相」の中で，青年Aを許媽葵，詩人を洪棄生と特定し，林獻堂を含め，台湾知識人の類型を分析している。

29) 森崎光子は「佐藤春夫と台湾福建の旅」の中で青年Aに関して佐藤は同情的ではないと記述している。

口も少ないと述べ、大きな問題ではないと切り捨ててしまう。そして、開明の程度もそんなに変わらない本島人に対する日本人統治の同化論か平等論か、どちらを是とするかと佐藤に迫る。林は、日本人植民者に対して侮蔑さえ感じているのである。

御言葉に従って愚見を申述べますが、御意見は同化だの平等だのと限られた範囲で御高察されたところで根本的の面倒があるかと存じますので、私はあえて同化論でも平等論でもなく別に友愛という一説を立てさせて頂こうと思ひます。

答えに窮した佐藤は、一世紀かかるか二世紀かかるかわからないが、小異に拘らず友愛による差別の撤廃をすべきであると述べた。林は、「御説のごとき文明の来る日がありますか」と更に問う。

失礼ながら、現実的に苦悩を背負わされている側にいる我々は一世紀二世紀は愚か一年でも二年でもいや一日でも二日でもこの重荷が少しでも軽くなればいいと切望するに急でこの苦しんでいる側の状態の切実さを問題とすることを閉却された傾のあることは堂々たる正論たる貴説のために最も遺憾です。

佐藤は自説の致命的な欠陥を衝かれ恥じ入る。「大蛇の如くに長々と横たわっている自分の怪談の残骸を自分の胸の中に蔵しておかなければならないのを厭わしく感じた」のである。この会見の様を描くことが、「殖民地の旅」という作品の大きな目的であったことは間違いない。

林によって取るに足らずと切り捨てられた蕃人＝原住民は、佐藤の台湾旅行の最中に内地人警官を殺害するという事件を起こしている。また、「殖民地の旅」が発表された1932年には既に霧社事件（1930）の顛末が広く知られていた。植民者の側であることの居心地

の悪さを感じながらも佐藤は多くの台湾知識人によって無視された蕃人についても記述している。

1-4 「霧社」－台湾原住民との出会い

「霧社」は、訪台後5年を経過した1925年に『改造』三月号に掲載された。「女誠扇綺譚」の発表と同年である。

「霧社の日本人は蕃人の蜂起のために皆殺しにされた」－サラマオ社の蜂起によって日本人警察官など19名が殺傷された事件を風聞はこう伝えた。佐藤は霧社を尋ねる途中でこの噂を聞いたが、事実は恐怖と憎悪で興奮した植民者たちによって誇張されていた。「内地人」ではなく「日本人」というこの風聞に佐藤は台湾統治の矛盾があると指摘している。「霧社」を書く彼の脳裏には、おそらく林献堂との会談があったことであろう。

「霧社」には、日本人を殺され、憎悪で激昂する人々、原住民と生活圏を共にし、生きる青年、統治者としての役人など、多くの日本人植民者が登場する。また、原住民の姿も佐藤の直接の体験を通じて描かれている。この佐藤の体験を理解にまで深めたのが森丙牛の存在であったという。

霧社近辺で出会った原住民は彼に深い印象を与えた。荷物を奪い合う荷担ぎ人たちの中には明らかに梅毒によって鼻の欠けた男がいた。梅毒は植民者によってもたらされたものである。そしてさらに植民者によって持たされた「日本語」を繰る宿の給仕の少女は、顔に刺青をしている。佐藤に年を聞かれると彼女は「蕃人年ナイヨ」と答え、彼に指差された刺青を平手で隠した。「この動作と表情とは予に親愛の情を感じさせた。しかし包まず言ふが、その種類は予が予の愛犬に対していただくものと類似していた」。

佐藤は蕃人の小学校も見学し、そこで日本

語が教育されている現場を見た。そこで蕃人社会では想像の及ばない概念を植えつけられる子供たちの姿をみて「与える人と与えられる者に」同情と不快の念を覚える。

もっとも面倒であったのは、台湾で一番大きな町は？「台北」、日本で一番大きな町は？「東京」、日本で一番偉いお方は？「天皇陛下」、台湾で一番偉いお方は？「総督閣下」。四つの問題はすべてのコンビネーションで答えられた。台湾で一番偉い人は？「東京」……

さらに蕃人の知能が決して世人の想像するようなものではないこと、医学部を卒業したのもあることを付け加えている。しかし、佐藤に最も衝撃を与えたのは、日本人警官に捨てられた異様な風貌—日本の着物を身に着け、顔に刺青をした大きな女—の蕃婦と売春をするその娘たちであった。この異様な風貌の女は、日本人警察官近藤儀三郎と結婚し、捨てられたマヘボ社の頭目モーナルダオの妹テワスカ、また儀三郎の兄勝三郎が捨てたパーラン社のイワンロポウがモデルとなっているとされている。さらに下山事件（大正13年、台湾の蕃地での警察官を退職後、頭目の娘であった妻や子を捨て、蕃婦2名をともなって帰京し、売春をさせた事件）が、佐藤の頭の中にあったのかもしれない³⁰⁾。

1-5 植民者であることの不安

霧社で出会った蕃婦の娘は「タバコ頂戴ヨ」と佐藤に近寄り、彼を家に誘う。娘は内地人とその女との子供である。佐藤は少女が内地人への好意から彼を招き入れたのか、と訝る。しかし、暗い家のさらに奥に少女の手で招き入れられたとき、かれは突然、「理由のはっきりしない恐怖に打たれ」た。この暗い家の

奥に蕃刀を持った男が潜んでいるかも知れぬ、また、かの蕃婦が今この家の外で口ずさむ歌は、仲間を呼ぶ合図なのかも知れぬ。少女がサラマオ社に向かう軍人の動きについてあまりにくどく聞いたとき彼の疑惑は、恐怖に変わる。そこには台湾という植民地で植民者であることへの不安があった。

「フタリ一円五十銭ヨ。ヒトリ一円」、単なる売笑の婦であることを知ると彼は強引に戸を開けさせ逃げ出す。総督府という後ろ盾が日本人旅行者の佐藤にはあった。しかし、たった一人で蕃人の娘と向かいあうとき、後ろ盾はない。このような不安は1922年に書かれた「南方旅行」の中にも現れている。

台湾の対岸の廈門に旅行した佐藤は、この地では日本人への反感が激しいと自覚し、案内者が夜、外出し一人で寝るとき「仮に私が殺されようとも、そうして私の屍が海の中に投げ込まれても、全く廈門では方法もないであろう」と想像する。漳州では街を歩くとき日本語で話すことも禁じられる。

佐藤はこの台湾と福建の旅を通じて日本の支配下で苦しむ人々の姿を見た。様々な階級の男や女が、そしてなんと多くの原住民が彼らの生活に乱入してきた他者によってこれまでの生活を奪われていることか。日本による「文明化」は、梅毒の男や、かの蕃婦たちの生活が象徴する荒廃と伝統の消滅であった。佐藤は作家として台湾の現実に批評的な眼差しを向けた。彼には日本の植民地支配を当然視する、国家意識、つまり国家と自分を同一視するような志向はなかった。国家を背負わない彼の対現地人に対する意識は、あるときには不安と恐怖で臆病なまでに震える。

理想では、同化を言い、平等を語ってはいても、日本という帝国の中心に吸収されていく植民地の富と、文化の否定がもたらしたのは、植民の本質であるところの物質的・精神

30) 「霧社」覚書」の中で、蜂谷宣明が詳しく考察している。

的収奪であった。

第二章 「女誠扇綺談」をめぐって

2-1 作品とその評価をめぐって—先行研究から

「女誠扇綺談」は、1925年、雑誌『女性』に発表され、直後に単行本として出版された。その後、台湾を題材にした作品集『霧社』（1936）に、「日章旗の下に」（1928）、「旅人」（1924）、「霧社」（1925）、「殖民地の旅」（1932）、「かの一夏の記」（1936）などとともに刊行された。「女誠扇綺談」は、当時どのように読まれたのだろうか³¹⁾。

橋爪健「旧さの中の新しさ 五月創作評」
『読売新聞』1925.5.7

現世風な旅愁と怪異な幻想とが程よく抱き合っている。作者はポオのまへに自らを卑下しながらも、恐らく「アッシャー家の崩壊」に対抗すべき、「沈家の没落」を歌はうとういふさかんな自恃をもちつつ筆をすすめたに違いない。荒廃の美を写すその歴史観と叙情味と、紀行風なその低回味と、異国情調と伝説と現前の風物とを錯絡たらしめるその怪奇小説的構想と、これら三者が相俟って幻視一如の近代の三昧境を描出している。

島田謹二「台湾文学の過現未」1939『台湾時報』1939.9

真夏の熱帯の自然といひ、シナ系統の文化といひ、そのことごとく日本の伝統美の埒外に立った道具仕立てをもってきて、嘗てわれらの文学にみられなかったやうな世界を構築している。…（中略）これは素材と取り扱ひの二方面からみて、典型的な異国情趣の文学なのである³²⁾。

この橋爪・島田の評価が「女誠扇綺談」をめぐる現在に至るまで定着している典型的な評価である。しかし、藤井省三によれば、佐

藤は、当時の批評を「悪評」ととらえ、「評家を軽蔑する気持ちになった」という（「女誠扇綺談」単行本あとがき）。すなわち、この作品を異国情趣ととらえたこれらの評価を指して「悪評」としているのである。藤井はこの「女誠扇綺談」が「台湾ナショナリズムへの友愛にみちた眼差しをもって書かれている」と指摘し、「異国情趣」という評価を「日本版オリエンタリズム」にすぎないと述べている。しかし、佐藤の「友愛」は「殖民地の旅」の中で林猷堂によって一蹴され、林の前で彼はその一説を説いた自分を恥じたのである。

「女誠扇綺談」の作品の深層にはなにが存在するのであろうか。以下、「女誠扇綺談」における感覚表象とそこに現れる言葉、登場人物の分析を通じて、重層的読みの可能性について考察していきたい。

2-2 「女誠扇綺談」のテキストの異同について — 佐藤春夫の書き換え

2-2-1 三種類のテキストの存在とテキストの異同について

「女誠扇綺談」には三種類のテキストが存在する。第一のテキストは、『女性』（雑誌）1925.5（1925版と呼ぶ）に発表されたもの、第二のテキストは『女誠扇綺談』（単行本）1926.2（1926版）、第三のテキストは、『霧社』1936.7（1936版）である。

≪1925版から1926版への書き換え≫

4章—①（最後のところ）彼が私との決別を惜しんで私に与えた一詩を私は覚えている。—あまり上手な詩でもないさうだが、私にはどうでもいい。登彼高岡空夕嘆～（追加）

同 p 69

5章—②（2回目の廃屋への訪問の際、黒檀の寝台をみて）これだけの壇木の家具を、今

31) 藤井省三『台湾文学その百年』「大正文学と植民地台湾 佐藤春夫「女誠扇綺談」」より

32) 『台湾文学集』所収

だにここに遺しているのは、情けからではなくやはり怖ろしいからであろう

⇒これだけの立派な壇木の家具を、今だにここに遺してあるのは、正義や憐憫によってではなく、やはり恐怖からであろう。同 p 73

5章-③ (壁のヤモリへの言及) 六坪ほどの壁に三四十疋はいた。(追加) 同 p 73

6章-④ (穀物商への訪問の際の鸚鵡の声) 「汝来」(1925版) ⇒ 「汝来仔請座」(変更) 同 p 83

6章-⑤ (娘は顔が蒼白に) それを包み隠すのはむなしい努力であった。(追加) 同 p 83

6章-⑥ (娘は私を見上げた) その好ましい瞳の中に嘘はなかった。(追加) 同 p 83

6章-⑦ (娘は)「美しい扇ですわね」さう言っ物珍しさうに扇の面をみつめている。それは答えに窮しているのである。⇒「美しい扇ですこと」さう言っ物珍しさうに扇の面をみつめていた。それは答えに窮しているのである (削除)。同 p 84

6章-⑧ (娘とのやりとりの最中に鸚鵡が) 「ケ、ケ、ケツ、ケ、ケ」鸚鵡が私の言葉に反抗して一度に冠を立てた。(追加) 同 p 84

6章-⑨ 泣いている女は更に言った。⇒姿の見えない女はむせび泣きながら更に言った。(変更) 同 p 85

6章-⑩ その代わりに扇を私にいただきしてください。⇒ただ、あなたが拾っておいでになったその扇一蓮の花の扇を私に下さい。(変更) 同 p 85

≪1926版から1936版への書き換え≫

1章-⑪ 昔は赤嵌城の真下まで海があったといふが、今はこの丘からまだ、二三町

も海濱があり、砂丘に似た墓場である(追加) 1936版 p 29

6章-⑫ (最後の記事をめぐって)「それが原になって自分は僚友と争論の末、退社し、食ひつめて内地に帰ってきた。」(追加) 同 p 86

2-2-2 書き換えの意味

今回は、初出の『女性』(雑誌)1925版、新潮版(全集)1926版、『霧社』(単行本)1936版、を比較した。大きな変更は1925版から1926版の間になされた。

2-2-1 でみた1925版から1926版への変更の大きな特徴は、表現の強め、ではないかと思われる。エキゾティズムや不気味さが変更によって明らかに増幅している。変更は後半の部分を中心に行なわれているが、②~⑪までは、それぞれの内容をさらに際立たせる表現である。①では世外民に対する友情を表現し、漢詩を追加している。また、⑦に関しては、「娘が答えに窮している」という文章の削除であるが、この文章の削除によって、主人公の男の娘に対する追求が弱められ、反対に娘に対する好感がかもし出されている。

また、1926版では、各章に名前がつけられた。1. 赤嵌城址 2. 禿頭港の廃屋 3. 戦慄 4. 怪傑沈氏 5. 女誠扇 6. エピローグ など。

1926版への変更は作品を理解しない「悪評」に対する佐藤の応答であったのかもしれない。

さらに1936版から2箇所追加がみうけられることを指摘した。⑫の追加によって、1926版でしめした佐藤の下婢にたいするシンパシーがさらに強められ、植民者であることの苛立ちが感じられる。また、第六章は「エピローグ」から「沈氏の花婿」へ名称が変更されている。

2-3 「女誠扇綺談」における感覚表象とことば

2-3-1 感覚表象に関する考察

次に「女誠扇綺談」における感覚表象について考察したい。テキストの展開とともに、どのような感覚表象がみられるか具体的に分析していきたい。

一. 赤嵌城址

「女誠扇綺談」は語り手の「私」が友人の台湾人の案内で禿頭港（台南から40分ほどの場所）という街を訪れることから始まる。「私」はかつてオランダ人統治下で栄えたこの町の荒廃の有様を見、暗い気持ちになる。

1-①それはただ低い湿っぽい蘆荻の多い泥沼に沿うた貧民窟みたやうなところで、しかも海からは殆ど一里もへだたってる。泥を埋め立てた塵塚の臭いが暑さにむせ返って鼻をつくいやな場末で、そんなところに土着の台湾人のせせこましい家が不行儀にそれもぎっしりと立ち並んでる。《嗅覚・視覚》

1-②熱国のいつも青々として草いきれのする場所でありながら、荒野のような印象のせむか、思い出すと草が枯れていたような気さへする。

《嗅覚・視覚》

1-③私の目の前に広がったのは一面の泥の海であった。黄ばんだ褐色をして、それがしかもせせこましい波の穂を無数に後から後からと翻して来る、…昔は真下まで海だったといふが、今はこの丘から二三町も海辺が砂丘に似た墓場である。（それほど埋まってしまったが）しかし、その無限に重なり続く濁浪は生温かい風と極度の遠浅の砂とに煽られて、今にも丘の脚下まで押し寄せてきそうに感じられる。

《嗅覚・視覚・触覚》

1-④激しい景色の中に闊として何の物音も響かない。時折にマラリア患者の息吹のように蒸れたのろい微風が吹いてくる。それら凡てが（一種内面的な象徴として）悪夢のような不気味さを私に与えた。

《聴覚・触覚》

1-⑤（地質について）砂でなくもっと軽い、歩く

度に足元からひどい塵が舞い立つ白茶けた土であった。《視覚・触覚》

1-⑥（不意にあたり絃の家のどこかから）絃と呼ばれる胡弓を鳴らしたしたものがあった。

「月下の吹笛よりも悲しい」と（友人は言った）

《聴覚》

このような不潔な街、なんのとりえもない街に来たことを彼は後悔し始める。

二. 禿頭港の廢屋

友人と歩きながら「私」は立派な石垣の跡のある《城》のような廢屋を見つけ、好奇心に駆られ中へ入り、女の声を聞く。

2-①汚いながらも妙に裕に感ぜられるというのも、どうやら石がたくさんに用いられていることがその理由らしい。…その別の側、すなわち私たちが向かって立った前方は例によって悪臭を発する泥水である。《嗅覚・視覚》

2-②「全く豪華な家だな。…あの家は裸の煉瓦造りではないのだ。美しい色ですっかり化粧している。一帯に淡い色の漆喰で塗ってある。そのぐりりはまたくっきりと空色の細い輪郭だろう。色が褪せてしらっかけてしまっているところが却って夢幻的ではないか。《視覚》色彩

2-③不意にその時、二階から声が出た。低いが透き通るような鼓であった。…私には分からないことばで、だから鳥の叫ぶような鼓に聞こえたのは一層変であった。《聴覚》空間

その声は泉州のことばで、「なぜもつとはやくいらっしゃらないの」といった。土地の老婆は彼らを死霊にあつたものとして恐れた。

2-④（老婆は）恐怖に似た目つきになり、気のせいか顔色まで青くなった。《視覚》

三. 戦慄

廢屋は沈家と呼ばれる一夜にして落ちぶれてしまった家の跡であった。その家には一人娘がいて財産と共に婚約者も失った。それがもとで主人と妻は病死、娘は狂気に陥る。世

間では沈家の先祖の悪行が祟ったのだとうわさした。娘はその後20年間、訪れない夫を恨んで待ち続けた。

3-①(娘の姿を見かけないので)病気でもあろうかと思って人が行ってみると、お嬢さんは寝床でもう腐りかかろうとしていたんです。…それなのに涼しい声でいつものように呼びかけたのだそうです。

《視覚・聴覚》

四. 怪傑沈氏

友人の世外民はこの話を聞いて恐れた。廃屋に美女の魂が宿るとするのはシナ文学の定型である。「私」は、誰かが待ち合わせしていたに過ぎないと一笑に付す。しかし世外民は打ち沈んだままであった。

五. 女誠扇

「私」はその声の正体が幽霊でないことを証明しようとし、世外民をまた廃屋に連れ出す。埃だらけの家の中には立派な寝台が残されていた。そこで女誠扇を拾う。

5-①(廃屋に入って)思わず私がうなったのは例のことばを聴いたからではないのだ。ただの閉め切った部屋の臭いである。どんな臭いともいえない。ただ蒸れるようなやつで、それがしかし建物がいいから熱いのではない。割りに冷たくっても蒸れるとでもいふより外にはいいようがない。この臭いを世外民は案外平気らしかった。天井を見ると真っ白に粉が吹いて黴が生えている。

《嗅覚・視覚》

5-②寝床の後ろには大小幾疋かの壁虎が時々のっそり歩く。(台湾ではめずらしいものではないが、ただこの家には多すぎる)六坪ほどの壁に3・40疋はいた。

《視覚》

5-③ 帰りがけにもう一度窓の外の碧い空をみた。

《視覚》色彩

5-④「しかし、君、あの黒檀の寝台の上へ今できた大きな赤い蛾をみなかったかね。」《視覚》色彩

六. 沈氏の花婿(新潮版ではエピローグとなっている)

しばらくして、あの廃屋で若い美しい男の首くくりがあった。世外民は女誠扇を不気味だから捨てよと言うが、「私」は迷信だとし取り合わない。しかし、だれが死体を発見したのだろうか。

6-①「それがね、口元に微笑を含んでいたというので、やっぱり例の殻で引き寄せられたのだ。『花嫁もとうとう花婿をとった』といっているよ。皆は。それがさ、やっぱりもう腐敗して少しくさいぐらいになっていたのだそうだ。我々が聞いたあの殻や、それに紅い蛾などを思い出してね。」

《視覚・嗅覚・聴覚》色彩

6-②私もふっと死の悪臭が鼻を掠めるような気がした。あの黴臭い広間の空気を鼻に空想したのだろう。
《嗅覚》

発見者は穀物問屋の娘であった。靈感によって発見したと言う。しかし、娘は女誠扇も知らないし、泉州語も知らない。

6-③みんなが黙っている中に不意に激しくすすり泣く声がして、それは鸚鵡の背景をなす帳の陰から聞こえてきたのだ。…「みんなおっしゃってくださいまし。お嬢様」
《聴覚》空間

声の正体は娘の下婢であった。主人が世話する内地人に嫁ぐことを嫌って彼女もまた自殺したのであった。

2-3-2 「女誠扇綺談」における感覚表象と表現の特徴

以上、「女誠扇綺談」における佐藤の感覚表象を見てきた。彼の感覚表象の中で、とくに際立つのは《聴覚・視覚・嗅覚》である。

1-①~⑤にあるような「禿頭港」の荒廃の描写は、この三つの感覚を組織的に使うことによって実体化された。とくにこの街に漂う

悪臭（2-①），また，廃屋に満ちる蒸した空気（5-①），死体の腐る臭い（6-①）は、「私」の体験の深さを表している。嗅覚は異文化体験の中でもっとも適応しにくい感覚と言われるが，彼が耐えられない臭いに世外民は平気だったりする。このことは、「禿頭港」が日本ではなく，異国であることを強調する表現であると考えられる。

視覚については全体的に細かく描写されているが，とくに色彩に関わる「紅い蛾」の存在について注目すべきであろう。これは，無論，沈氏の娘を象徴している。その不幸は旧弊が招いたものに違いない。荒廃した街の中の「紅い」存在はいっそう，この街の衰退を際立たせているかのようである。

全ての感覚がこの街の荒廃を示す中で，聴覚については，2-③のように，女の声を好ましいものとしてとらえられている。彼らには，実際には見ることのなかった下婢，彼らの視線にさらされることのなかった女は，日本人との結婚を嫌って死んだ女である。

また，佐藤の表現の特徴は，メタファーが多く使用されていること，また，直喩表現も既存のものではなく独特の言葉が選ばれていることなどである。

作品中のメタファーには，「禿頭港 廃屋 走馬楼 泉州 狂気 病気 老寡婦の呪い 世外民 黒檀の寝床 ヤモリ 女誠扇 赤い蛾 若い美しい男 鸚鵡」などが挙げられる。また直喩表現には「マalaria患者の息吹のようにのろい微風 低いが透き通るような声

鳥の叫ぶような声 火が消えたようになった まるで沈の家そっくりだ 玉葉仔のやうな まるで社会学者みたいに知っていて 深淵のやうに沈黙して 蒸れるやうなやつ 手のひらほどもある（蛾）」などが例として挙げられる。

特に禿頭港をめぐる空気を肌で感じさせるよ

うな描写と死体をめぐるにの描き方はヴァーチャルな感覚を誘う。

2-3-4 かれらの話した言葉—プリミティブな女のことば

主人公の男は日本人であり，台湾の日本系新聞の記者である。また，その友人の世外民は亀山（台南から汽車で一時間のところ）出身の台湾人である。世外民は主人公の男の勤める新聞社に漢文を投稿した。その漢文は当局から注意を受ける内容であったという。また，世外民はペンネームである。かれは，地方の豪家の出身であるため，漢文的教養を十分に身につけている。さらに，主人公の男とは日本語で問題なく会話を交わしている。最後に登場する裕福な穀物商の娘も日本語を話す。ここで日本語が社会階層を反映していることがわかる。

下の表からわかるように，1920年の日本語理解者は2.86%にすぎないことを考えると，街の老婆や子供たちはおそらく廈門語（閩南語）を話していると考えられる。しかし，沈家の人々，ならびに穀物商の下婢は「泉州語」を話していた。沈家は日本支配の前に没落しているため，日本語とは無縁である。下婢は日本語の理解もできたようである。しかし，恋人とは泉州語で話していたのであろう。福建からの移住者が多かった台湾では，現在，その地域の言葉を「南語」と概称している。しかし，福建省は方言の多彩な地域であるため，当時の廈門語と泉州語には差異があったと考えられる。それは主人公の男が土地の言葉のある程度理解しているにも関わらず，廃屋の女の簡単な呼びかけの声が聞き取れなかったこと，しかし世外民は理解していることなどから推察できる。また，最後の場面で，主人公の男が世外民と訪れる店先の鸚鵡は「汝来仔請坐」と話した。

この多様な言語使用は何を示しているのか。主人公の男は、世外民の漢文に反逆精神を見た。そして、内地人との付き合いを好む穀物商を俗物と考えている。泉州語で話す恋人たち、女誠扇に書かれた漢文、佐藤は、「前・台湾」において鄭芝竜の話していたであろう泉州語を日本支配の前の台湾のプリミティブな象徴としているのではないだろうか。

植民地台湾下の日本語理解者

年	台湾人総数	理解者数	指数	理解者率
	(1万未満切り捨て)		(1905を1とする)	(%)
1905	309万人 (ただし1907)	11,270	1	0.38
1915	341万人	54,337	4.82	1.63
1920	353万人 (ただし1919)	99,065	8.79	2.86
1930	440万人	365,427	32.42	8.47
1931	437万人	893,519	79.28	20.4
1933	461万人	1,127,509	100.04	24.5
1937	510万人	1,934,000	171.60	37.8
1940	552万人	2,885,373	256.02	51.0
1941	568万人	3,239,962	287.48	57.0

1905年から1930年までは台湾総督府『台湾現勢要覧昭和15年(1940)版』および『台湾経済年昭和16年版』、1931年から1937年までは同『台湾事情昭和14年版』、1940年、41年は鐘清漢『日本植民地における台湾教育史』(東京多賀出版、1993)による。1931年の人口が前年より減少しているのは、典拠資料間の相違による。藤井省三「〈大東亜戦争〉期の台湾における読書市場の成熟と文壇の成立」より

2-3-5 台湾の華人たち-沈家の末裔

作中で、禿頭港の老婆は沈家の顛末を語るくぐりで「まだつい60年になるかならぬかぐらいのことです」と語る。「女誠扇綺談」は1920年~25年ごろの物語と考えられ、逆算すると、沈家の没落は1860年前後のことと推測される。1871年の日本の台湾出兵の10年前である。そのころ、台湾は、清国とイギリスと

の「天津条約」に基づき、淡水、基隆などの主要な港を開港した。安平の港も1863年に開港している。安平の湊からは砂糖が多く輸出され、アヘンと雑貨が輸入されたという³³⁾。この頃を境に台湾も世界経済の中に組み込まれた。東南アジアの華僑の優勢を象徴したジャンク貿易も西洋帆船に駆逐されていく。ちょうどその頃、沈家は没落したのである。作中の男の言葉どおり、沈家の始祖より「もっと大きい暴虐者」がそれ以降登場するのである。

斯波義信『華僑』には「霧峰の林氏のルーツ」という箇所がある。「霧峰の林氏」は漳州の寒村出身の林石を祖先とする。林石は17世紀の半ばに当時まだ移住が禁止されていた台湾に単身で渡った。日雇い仕事などで元手を作り、弟たちを呼び寄せ開墾村に入った。近くには原住民の住まう山地もあった。林石は「土地は買ったというよりも不法に占めたらしく、農業水路で困って原住民との境とし、耕している間も武器をはなさなかった」³⁴⁾という。後に林石は耕作を止め、水運業を営むことになる。しかし、商売で大成功した林一族も林爽文の大乱(1786)に突如、巻き込まれ、激しい抗争の中で一時的に没落する。

この「霧峰の林氏」とは佐藤春夫が台湾旅行中に会談した林猷堂の一族を指す。「女誠扇綺談」における「沈家」のモデルはおそらく林猷堂の一族であろう。漳州から移住し、兄弟とともに原住民の土地を「不法に土地を占拠」した林家の噂は、「植民地の旅」の中で案内人の青年Aが、佐藤にもたらしたものである。

乾隆七八年のころ、もう蕃害が薄らいだからというので漳州府平和の林江³⁵⁾という人が同族を率いて

33) 伊藤潔『台湾』p54~55

34) 斯波義信『華僑』p89~93

35) 「植民地の旅」の中の人物名は仮名となっている。

この地に阿単霧庄を建てたものという。Aは庄名の説明が不十分と言う代わりといふわけでもあるまいが林家に関しては古来の様々な噂があると聞かせてくれた。名高い家柄だけに何かと言いふらされたものが広く伝わっているものと見える。僕は後年安平港に取材して拙作女誠扇綺譚といふのをものにしたが、この時A君から聞いた話もその一部に入れた。

作中には世外民の一族にも同様の噂があるとされている。当時の台湾の知識層は中国大陸にルーツを持ち、そのことを遠い過去の記憶ではなく近いものとして感じていたのである。若林正文はアンダーソンの「巡礼圏」の概念を下に中華帝国による「士大夫の巡礼圏」が存在したと述べている³⁶⁾。漢詩を作る世外民は「士大夫」の末裔である。

2-4 世外民と私

「女誠扇綺譚」の主な登場人物は、語り手の「私」と台湾人の友人「世外民」である。「私」は内地の生活に鬱屈した新聞記者である。かれは社員であるにも関わらずほとんど出社もせず、新聞嫌いと豪語する。この新聞記者のモデルが佐藤自身であることはいうまでもない。

また、もう一人の主人公世外民には前出「植民地の旅」で出会った青年Aの面影が色濃く投影されている。

「女誠扇綺譚」では「植民地の旅」と同じように私は世外民の案内で禿頭港に出向き、彼の演説を聞くことになる。前述のように二人は佐藤の新聞の主催する漢文欄が縁となって友人となる。

この世外民が女誠扇綺譚の案内人であり、そこで迷う人でもある。幽霊を恐れる彼は台湾華人の伝統を生きている人間なのである。禿頭港の荒廃も沈家の歴史も彼の住む世界そ

のものである。一方、主人公の私はそのような伝統とは無縁な存在である。「女誠扇綺譚」において佐藤は台湾の漢人の中国人性（チャイニーズネス）の重層性を世外民と下婢によって表現している。世外民は漢人で地主であり、漢文や日本語をも操る。下婢は泉州語を話す、身寄りのない女性である。

姚巧梅³⁷⁾は「女誠扇綺譚」を「私」の成長譚であるとした。内地（植民地）と外地（非植民地）の境目である禿頭港を舞台としたこの作品で、作者の佐藤自身も内向的傾向から脱し、社会的な目を持ち始めたと評価する。姚はこの作品を他の佐藤の憂鬱物作品の系列の中に位置づけようとした。そして「自己愛から人間愛へ」という彼の心象の変化をたどり、私と世外民の一致する点としない点について述べ、興味深い論を展開している。姚の指摘するように、「私」と「世外民」は日本支配に対して反抗する気概を持つ点で一致する。彼らは植民者と被植民者であるが、男性知識人同士であり、もし、同じ出自を持つものであったら双子の兄弟のように似ていたであろう。彼らが囚われる沈家をめぐる物語の舞台は荒廃する禿頭港である。

この禿頭港は、二人が街を歩いた時代、姚が指摘するように内地と外地の境界であった。しかし、時代を遡ると台湾と大陸の「境界」であったことがわかる。台湾の華人の重層的なエスニシティは、そこを起点にして始まった。沈家の物語を背景に置くことによって少なくとも60年間の台湾島の歴史が「女誠扇綺譚」の物語の遠景に置かれた。

16世紀以降、台湾においては、オランダによる支配があり、またそれに対する鄭芝竜の息子（母は日本人田川氏と言われる）鄭成功の抵抗（1662）があった。先に述べたように

36) 『台湾抗日運動史』 p 434~

37) 「佐藤の台湾物「女誠扇綺譚」を読む」『天理台湾学会報第三号』より

中国からの最初の集団移住はこの鄭成功の大軍であったのである。繰り返される移住が折り重なるようにして台湾の歴史を形作っていく。そこに明・オランダ・清、そして日本支配が加わり、台湾は中華的なものと日本のものとの狭間で複合的なナショナル・アイデンティティを形成することになる。

台湾において日本人植民者と対抗するのは、台湾人＝被植民者という一律な名づけの出来る存在ではないことを「女誠扇綺譚」から読み取ることが出来る。

チャイニーズネスの境界は、国家という近代の制度によって作られたのである。

終章 チャイニーズネスの境界と国家・女性－「女誠扇綺譚」の深層

日本の台湾支配から30年あまりの月日を経て、「女誠扇綺譚」は書かれた。そこには様々な人物が登場する。日本人と台湾人という言葉だけでは表現しきれない多様性が、言語や感覚表象を通じて描かれている。

この作品にはいくつかの二重性が隠されている。「私と世外民」「漢文と日本語」「泉州語と台湾語」「沈家の娘と下婢」などである。そして、現在と過去の時間が交錯し、内地人と本島人が出会う地点に「私」がいる。植民者と被植民者、有産か無産か、男性と女性、エスニシティなどが複雑に交差するのだ。

「女誠扇綺譚」の豊富な感覚表現は、「禿頭港」という町の荒廃を表わした。「聴覚」「嗅覚」「視覚」「触覚」などの豊富な感覚表象を用いて、当時の街や村を覆っていた迷信や因習で閉ざされた雰囲気を描く。作中の《嗅覚・視覚》、この二つの感覚は、とくにそこが荒廃しているのみならず、異郷であることを示した。旧悪がもたらしたとされる沈家の没落と、さらに大きな暴虐によるこの街の荒廃は重なり合い、台湾の歴史の重層性がそ

こに表現されている。

佐藤はこの物語の中でこの「泉州語」を話す、涼しげな声の持ち主を、日本支配の中で港さえ干上がってしまうような荒廃と迷信にとらわれた街の中に置いた。「～したい」と「私」の価値を表明した女の存在を、彼は、プリミティブなことばとともに美しいものとして描いたのである。しかし、彼女を縛る伝統が、下婢がそこから抜け出て生きることを許さなかった。下婢を失うことに絶望し死んでしまった「美しい男」も、沈家の伝説が象徴する「紅い蛾」のように弱く不吉な存在である。

あの美しい声の主、下婢は、内地人との結婚を拒み自ら死んだ。彼女が死をえらんだのは、自分が台湾人であったからだろうか。レイ・チョウは、中国人の女性の自殺の趨勢が一貫して増加の一途を辿り、清朝においてそのピークを迎えていることについて、背景には中国の伝統的な列女伝説との相関があると指摘している³⁸⁾。では、それは中国人・女性であったからであろうか。

「女誠扇綺譚」では女誠のために沈家の娘と下婢という二人の女性が犠牲になる。二人は共に泉州の言葉を話し、台湾人の中でもより始原的なエスニシティをもつ存在として描かれる。この作品を通じて日本人の読者は「台湾人」のもつ多様性に気づく。沈家の娘は、父母や財産を失い、女誠に囚われ、訪れることのない夫を待って死んでしまった。その60年後、下婢は、おそらく秘密の自由な恋愛をした。しかし、養家の主人は内地人との結婚を強要する。彼女の周辺は沈家の娘より多くの新時代の問題があった。家に従うという家父長制、日本支配下での「日台雑婚」³⁹⁾

38) 『中国と女性のモダニティ』 p121

39) 1935年の「日台共婚法」に先立ち、1920年ごろには日台の婚姻が奨励されるようになった。

の強制、二夫にまみえずという女誠、「私」の愛、この間で身動きが取れずにケシの実を大量に食べて死んでしまう。

しかし、そのチャイニーズネスの境界で伝統を担わされた女たちの死は誰によって賞賛されるのか。前述のように若林正丈は、植民地のナショナリズムの登場が植民地国家（すなわち日本）によってのみもたらされるのではなく、「それに先立って存在した伝統王朝国家の官僚の巡礼圏と官僚たちの「共同体」の伝統的文化のストックから提供される」と指摘し⁴⁰⁾、台湾においても「士大夫の共同体」としての中華ナショナリズムと台湾大のナショナリズムが重層的に存在すると述べている。その担い手はいずれも旧官僚＝「士大夫」である。「士大夫」たちはおそらく女誠に死んだ女たちを称揚することであろう。下婢の死に「台湾ナショナリズムの誕生」の逆説的な宣告と見るのは「士大夫」たちの視線である。

国家という西洋の制度に対して華僑は「世外」の存在であった。不完全な中華の民であった彼ら、つまり祖先信仰の厚い儒教の考えからすると本籍に住むということが大前提であり、中国の外部に居住する彼らは必然的に不完全な存在となる、が移住先で出会ったのは、新時代の制度、国家だったのである。台湾は中華の内部でもあり、外部でもあった。そして日本の統治下では日本の内部であり、また外部でもあったのである。その境界はチャイニーズネスの境界であった。彼らは「胸に去来する中国」を持ちながらも、日本という帝国の支配を受けて、新たなナショナル・アイデンティティを求めることとなる。

「女誠扇綺譚」では、台湾のチャイニーズネスの始原的な存在「泉州」的なるものはすべて死滅してしまう。

われわれに突きつけられている責務は、純粋な民族的起源への回帰を擁護することではない。それよりもエスニシティが機能する場を見つけることだ。避けることの出来ない文化的な困難な状況におかれている、そして抵抗のために集団的アイデンティティが形成できるかもしれない、そういう場所としてのエスニシティが機能する場を⁴¹⁾。

誰がこの場でより起源的な存在であるか、誰がこの土地で最初の権利を持つのか、植民地支配後の社会は必ずこのような問題を突きつけられる。抑圧の歴史にしる独裁の歴史にしる、後戻りはできない。それによってもたらされた結果もその社会の事実として受け止めるしかないのだ。現代では、誰もが純粋で正統な存在ではない。

1994年、華人国家シンガポールの政治家リー・クワンユーはアジア的社会と西洋的社会の文化的政治的対立について、アジアの「文化は宿命である」⁴²⁾と語った。西洋的な価値の押し付けに対して、東洋の社会においては個人が家族の延長線上に存在し、個人は家族から分離した存在ではない、一方では家族もより大きな社会の一部である、と述べている。この「東洋」のアジア的社会も近代以降の国民国家の時代には、すでに無垢な存在ではあり得ないのである。近代アジアにおいては、階級社会が家族的社会観によって覆い隠されているに過ぎない。

「取り去ることの出来ない部分」としての帝国の支配は、チャイニーズネス＝中国性に新たな展開をもたらした。「エスニシティの機能する場」が台湾では、チャイニーズネスの境界だったといえるだろう。「女誠扇綺譚」

41) 『中国と女性のモダニティ』 p8

42) 「文化は宿命である」 FOREIGN AFFAIRS のリー・クワンユーの言葉『中央公論』1994年5月号 これに対して金大中が「文化は果たして宿命か」という反論を同誌1995年1月号に発表している。

40) 『台湾抗日運動史』 p 438～

の深層には、境界の島台湾におけるこのエスニシティと女性性という問題があったのである。

【資料】

佐藤春夫 台湾・南方関連作品年譜

- 大正9年《1920》28歳
6月～10月 台湾・福建旅行
- 大正10年《1921》29歳
1月「黄五娘」『改造』
3月「星」『改造』（「黄五娘」を改稿したもの）
8月「南方紀行」『新潮』（11月まで連載）
「廈門の印象」「章美雪女士之墓」
「集美学校」「鷺江の月明」「漳州」
「朱雨亭の事、その他」
「日月潭に遊ぶの記」
- 9月「蝗の大旅行」『童話』
- 大正12年《1923》31歳
9月 関東大震災
11月「魔鳥」『中央公論』
- 大正13年《1924》32歳
6月「旅びと」『新潮』
- 大正14年《1925》33歳
3月「霧社」『改造』
5月「女誠扇綺譚」『女性』
- 昭和2年《1927》35歳
7月 中国（上海、南京）旅行
- 昭和3年《1928》36歳
1月「日章旗の下に」『女性』
- 昭和7年《1932》40歳
9月「殖民地の旅」『中央公論』
- 昭和11年《1936》44歳
7月『霧社』昭森社
- その後の旅行
- 昭和13年《1938》46歳
5月 文芸春秋社の特派員として保田与重郎とともに華北方面（朝鮮・北支・満州）へ赴く。
9月 文学者の従軍海軍班として中国（上海）へ。
- 昭和18年《1943》51歳
11月 マレー・ジャワ方面へ視察旅行。

（『佐藤春夫集』新潮社（1973）、『南方・南洋／台湾』（1996）、『霧社』（2000）復刻版、『佐藤春夫全集』第12巻（1970）などを参考にまとめた。）

＜参考文献＞

- 『台湾小説集』（1943）大木書房
ゆまに書房 復刊（2000）
- 『台湾文学集』（1942）大阪屋号書店
ゆまに書房 復刊（2000）
- 佐藤春夫（1936）『霧社』昭森社
ゆまに書房 復刊（2000）
- 『佐藤春夫全集』第6巻・7巻・10巻・11巻・12巻（1968）講談社
- 『佐藤春夫集』新潮日本文学12（1973）新潮社
- 佐藤春夫（1994）『作家の自伝1 2』
日本図書センター
- 藤井省三（1998）『台湾文学この百年』東方書店
- 山口守、藤井省三他（2003）『講座 台湾文学』
国書刊行会
- 藤井省三・黄英哲・垂水千恵（2002）『台湾の「大東亜戦争」文学・メディア・文化』
東京大学出版会
- 小熊英二（1998）『日本人の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』
新曜社
- 尾崎秀樹（1971）『旧植民地文学の研究』
勁草書房
- 下村作次郎偏（1995）『よみがえる台湾文学』
東方書店
- 史明（1994）『台湾人四百年史 秘められた植民地解放の一断面』新泉社
- 伊藤潔（1993）『台湾』中公新書
- 戴國輝（1988）『台湾』岩波新書
- 河原功（1997）『台湾新文学運動の展開』
研文出版
- 黒川創編（1996）『南方・南洋／台湾』新宿書房
- 中村光夫（1962）『佐藤春夫論』文芸春秋社
- 木村一信他（1992）『作家のアジア体験 近代日本の陰画』世界思想社
- 斯波義信（1995）『華僑』岩波新書
- 若林正文（2001）『台湾抗日運動史《増補版》』
研文出版
- 矢内原忠雄（1929）『帝国主義下の台湾』
岩波書店
- レイ・チョウ（2003）『中国と女性のモダニティー』
みすず書房（田村加代子訳）
- ベネディクト・アンダーソン（1997）
『増補版 想像の共同体』NTT出版
（白石さや・白石隆訳）
- ルイ・アルチュセール（1975）『国家とイデオロギー』福村出版（西川長夫訳）

＜論文＞

- 陳光興（1994）「帝国の眼差し 準帝国とネーション・ステイトの文化的想像」『思想』1994（坂元ひろ子訳）

- 蜂矢宣明（1973）「霧社覚書 佐藤春夫と台湾」
『天理大学学报24巻5号』
- 姚巧梅（2001）「佐藤春夫の台湾物『女誠扇綺談』
を読む私と世外民を中心に」『天理台湾学会報
第3号』
- リー・クァンユウ（1994）
インタビュー「文化は宿命である」『フォーリ
ン・アフェアーズ』
『中央公論』1994年5月号